

02『プラズマ療法で起こる体内現象』

プラズマ療法にかかると、体内でどんなことが起こるのでしょうか？
プラズマ療法をうけたときの特徴的な体内変化についてまとめました。
YouTube WEB 版 #02 の本編とともに、お役立てください。

プラズマ療法は…… 頻度として、週に1回を目安に**プラズマパルサー**にかかる方へ、その効果を維持するために、**プラズマウォーター**を週に1本飲むことを推奨しています。



がん患者さんには…… 体内的経過観察のため、毎月の血液検査と3カ月～4カ月に1度のCT検査をお願いしています。

— プラズマ療法で起こる特徴的な4つのこと —

1 赤血球がひとつひとつ別れて流れる



赤血球は、無核細胞で、電気的に内側がプラス、外側がマイナスに偏りがあり、赤血球同士がくっついて凝集しやすくなっています。プラズマパルサーにかかると約3分程度で電気的な偏りが解消され、赤血球がひとつひとつバラバラになって流れます。(3～6時間は効果が持続します)



血流が促進され体内への酸素供給率が向上！

2 基礎体温が上昇

※3～6カ月程度、週1回プラズマパルサー30分、週に1Lプラズマウォーターを摂取。※個人差があります。

プラズマパルサーにかかると、健康的な体温の36.6°Cになるように調整されています。体温が低い人は、36.6°C付近まで基礎体温が上昇しやすくなります。

基礎体温の上昇で免疫アップ！

3 ATPの量が上がる

※個人差があります。

ATPは生命体が使っているエネルギーそのものです。プラズマ療法にかかるとATPの量が増えていくと、見た目にも活力が出てきます。



正常なアポトーシスを起こしやすくなる！

4 血液検査データが変化

次の項目に変化があります。

●肝臓の数値

γ-GTP、ALPの比率が変化し、ALPが増加します。

γ-GTP ガンマ-グルタミルトランスペプチダーゼ

……細胞が壊れた時に出る酵素です。

プラズマ療法での比率

1 : 1 → 1 : 7 ~ 10

※個人差があります。

比率が変化すると、癌細胞の周りに肉芽ができる

●白血球数

……白血球数の総数が上がり、好中球の割合が変化します。

プラズマ療法での比率（3カ月から6カ月後）

リンパ球：好中球 → 1(30%) : 2(60%)

1 (30%) : 1 (30%)

※個人差があります。

好中球比率が変わると、正常なアポトーシスが始まります

●赤血球数

……赤血球の総数が増えます。※プラズマ療法開始から約1年以上。

※個人差があります。

多赤血球症（心筋梗塞や脳梗塞の要因となりえる）と医師から診断されることもあります。しかし、一般的な多赤血球症と違って、プラズマ療法の場合、赤血球の凝集が抑制され、血流はスムーズになります。

体内における赤血球の酸素運搬効率が上昇

「アポトーシス」とは、プログラムされた細胞死のことです。

例えば、多細胞生物の細胞分裂の時や、胎児の手指が形成される時などに、アポトーシスが起きています。



癌細胞が正常細胞になる

※個人差があります。

プラズマ療法での癌細胞の消失は特殊です。癌細胞のまわりに肉芽が形成され、アポトーシスが起り、癌細胞が溶けて正常細胞になります。



癌が肉芽で包まれたとき、CT画面上では、輪郭がぼやけて少し大き見えます。

好中球はどうして増える……

血中の好中球の100倍の備蓄が肝臓にあり、それが体内に出たと考えられます。

プラズマ療法と症例

がんの超早期発見と再発防止に

第8回日本プラズマ療法研究会報告会にて、御川安仁院長（ナチュラルアートクリニック：東京都）によるプロテオ検査での癌の超早期発見、および尿中ジアセチルスペルミンの数値を使った検査で、プラズマ療法が、がんの再発や予防に有効だとする報告がありました。

その報告では、次の4つに場合分けして、プラズマ療法が実施されました。

1. プラズマパルサーと

プラズマウォーターを両方使う

2. プラズマパルサーだけ使う

3. プラズマウォーターだけ飲む

4. 何もしない（変化なし）



プラズマウォーター、プラズマパルサーを両方を使用した場合、尿中ジアセチルスペルミンによるがんの数値は**50% 減少**。片方だけでも数値に対して**30%の減少**という結果になりました。

プラズマパルサーの利用が困難な地方にお住まいの方でも、プラズマウォーターを飲んでいただけで、がん再発や予防に対応できます。

プラズマパルサー前後の血中コルチゾールの変化

YKC ウェルネス研究所 崔元哲代表の報告より

プラズマパルサー30分前後
コルチゾール量比較

前	後
6.2	4.9
10.6	3.8
8.1	5.7

（単位nM 40代男女 3名）

日本プラズマ療法研究会報告会で、プラズマパルサーにかかるとコルチゾールが確実に減少したことが報告されています。コルチゾールは、ストレスがかかると副腎皮質から分泌されるホルモンの一つで、多量に分泌され続けると、心筋梗塞や自立神経失調症などを引き起こす可能性があるといわれています。

プラズマ療法はコルチゾールの分泌を抑える作用があるため、疾患につながるのを未然に防ぐことが可能だということも分かります。



時事：新型コロナウイルスワクチンには警戒が必要

ウイルスは単体では自己増殖できません。自己増殖の設計図であるDNAまたはRNAは持っていますが、自己増殖を作り出す装置を持っていません。ウイルスは、増殖装置のある生命体に潜り込み、その増殖装置を利用して自己増殖していきます。この増殖の時、宿主となった生命体は、ウイルスの設計図を自分のDNAに取り込むことになり、ウイルスの影響を受けます。

ワクチン開発は、1796年、エドワード・ジェンナー医師（英国）が、弱毒化した牛痘のウイルス株を人に接種したことが最初です。これを牛痘から人痘に変え天然痘予防にワクチンとして使用しました。

現在、開発されている新型コロナウイルスのワクチンは、こうしたウイルスそのものを使う生ワクチンではなく遺伝子を使ったワクチンです。

遺伝子を使ったワクチンの例として、がんの遺伝子治療薬があります。ウイルスに、がんを縮小させる遺伝子を組み込んだワクチンは、高い効果が期待されていますが、重篤な副作用が発生することがあります。生命の源である遺伝子を含んだワクチンというのは、何が起こるかわかりません。そのため、新型コロナウイルスのワクチンについても、警戒が必要です。

日本プラズマ療法研究会 定例勉強会 WEB版

YouTube配信中！

日本プラズマ療法研究会

検索

前半



プラズマ療法で
起きた体内現象



後半

